

第 149 回 『 エナジア吸入用カプセル 』

「ノバルティスファーマ株式会社 那須朱香様」

参加者：天野、番場、前田、古市、波間、加納

【効能・効果】

気管支喘息（吸入ステロイド剤、長時間作用性吸入 β_2 刺激剤及び長時間作用性吸入抗コリン剤の併用が必要な場合）

【用法用量】

通常、成人にはエナジア吸入用カプセル中用量 1 回 1 カプセル（インダカテロールとして 150 μ g、グリコピロニウムとして 50 μ g 及びモメタゾンフランカルボン酸エステルとして 80 μ g）を 1 日 1 回本剤専用の吸入用器具を用いて吸入する。

なお、症状に応じてエナジア吸入用カプセル高用量 1 回 1 カプセル（インダカテロールとして 150 μ g、グリコピロニウムとして 50 μ g 及びモメタゾンフランカルボン酸エステルとして 160 μ g）を 1 日 1 回本剤専用の吸入用器具を用いて吸入する。

【特徴】

エナジアは、長時間作用性 β_2 刺激薬（LABA）であるインダカテロール酢酸塩、長時間作用性抗コリン薬（LAMA）であるグリコピロニウム臭化物、及び吸入ステロイド剤（ICS）であるモメタゾンフランカルボン酸エステル（MF）の配合剤であり、気管支喘息（吸入ステロイド剤、長時間作用性吸入 β_2 刺激剤及び長時間作用性吸入抗コリン剤の併用が必要な場合）を目標適応症として開発された。

喘息の治療では、患者が支障なく日常生活を送れるようにすることが目標であり、呼吸機能の改善・維持、喘息症状の長期コントロールが重要である。喘息の長期管理には、気道炎症の抑制と十分な気管支拡張の達成を目的とした薬物治療が主体となり、抗炎症作用を有する ICS を基礎治療薬とし、LABA や LAMA、ロイコトリエン受容体拮抗薬、テオフィリン徐放性剤などの薬剤を追加する。気管支拡張作用を有する LABA は ICS 単剤で喘息コントロールが不十分な場合の追加薬剤として推奨され、さらに近年、国内ガイドラインの治療ステップ 3 に該当する中用量又は高用量の ICS/LABA の併用投与で喘息コントロールが不十分な患者に対しては、気管支拡張作用を有する LAMA が追加薬剤の一つとして推奨されている。

一方、薬剤の服薬アドヒアランスの低下による喘息コントロールの悪化が治療上の課題として指摘されている。1 日に複数回吸入する、異なる吸入器を使用するといった煩雑な投与方法は、服薬アドヒアランスの低下の原因として考えられており、単一の吸入器で使用回数を減少させ、利便性を上げることは喘息の長期管理において重要となる。これらを踏まえ、単一の吸入器を用い、1 日 1 回吸入で、LABA のインダカテロール酢酸塩、LAMA のグリコピロニウム臭化物、及び ICS の MF の 3 つの有効成分の併用を可能にする。

【副作用】

- 重大な副作用
 1. アナフィラキシー（頻度不明）
 2. 重篤な血清カリウム値の低下（頻度不明）
 3. 心房細動（頻度不明）
- その他の副作用
 - 発生障害（8.7%）

【考察】

喘息治療のステップ 2 以上に該当する喘息治療を必要とする患者において他剤併用は必要不可欠。今回 LABA、ICS に加えて LAMA が配合されることで気管支の収縮抑制効果も期待でき、よりステロイドをより肺の奥まで到達させることができる。コンプライアンス向上のためにも、1 剤で 3 種類が同時に吸入できるという点は患者の QOL 向上に繋がる。確実な効果と確実な吸入に期待でき、吸入に関しても目視、音で吸ったかどうかを確認できるの非常に良い。一方で、デバイスの操作性に関してはディスクタイプより手間がかかるころではある。患者様に吸入の必要性を十分に説明して、1 日 1 回の継続的な吸入の重要性を説明していく必要がある。

【質問事項】

1. エナジアの中用量（MF80 μ g）とアテキュラの中用量（MF160 μ g）、同じ中用量にもかかわらずステロイドの量が違うのはなぜか。

→トラフ血中濃度がエナジアの場合MF80 μ gでもアテキュラのMF160 μ gと同程度だったためステロイドの量が異なる。その理由としてエナジアに含まれるグリコピロニウムの添加物のステアリン酸マグネシウムが粉を均一にする効果もあり、ステロイドの肺への到達度が向上し、少ないMFでも同程度の血中濃度になったと考えられる。

2. 吸入のところに逆に吹いてしまった場合はどうしたらいいか

→目視できない程度の微量な薬剤が漏れ出ている可能性があるため、新しい物に変えることを推奨している。吸入後カラカラ音がしていない場合は何らかの原因で吸えていない可能性がある。

3. 吸入後うがいの水を飲んではいけない理由

→ステロイド含有のため、より副作用を出さないようにするためにも、うがい後は水を吐き出すよう注意喚起している。